



穢
れ
て
も

墮
ち
て

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

警察署
組織犯罪対策課
最上 美冬 巡査部長



最上美冬と同じく組織犯罪対策課に所属している村木美緒里が行方不明となって、すでに二週間が経つ。

美緒里は美冬にとって警察学校時代からの先輩であり、同じ課の上司でもある。そして彼女達は恋人同士でもあった。

美冬はこの二週間、単独捜査で美緒里の痕跡を追い続け、捜査の末にある犯罪組織の存在が浮かび上がった。

美冬はその犯罪組織の拠点とおぼしき廃病院を発見し、潜入を試みる。

病院内は武装した男達が見回りを行っていたが、美冬は男達の日を掻い潜り、時に不意打ちで男達を無力化しながら、臆することなく病院の奥へと進んで行った。

見回りの男達に一瞬の隙を突かれ、美冬は捕らえられた。銃を奪われ男達の命令に従う他なかった。

銃を突きつけられた状態で薄暗い部屋へと通されると、部屋には血が乾いたような跡が目立つ作業着に帽子を目深にかぶった長髪の男が立っていた。

見回りの男が班長、ネズミを捕らえましたと長髪の男に報告する。班長と呼ばれた男は深く溜め息をついた…。

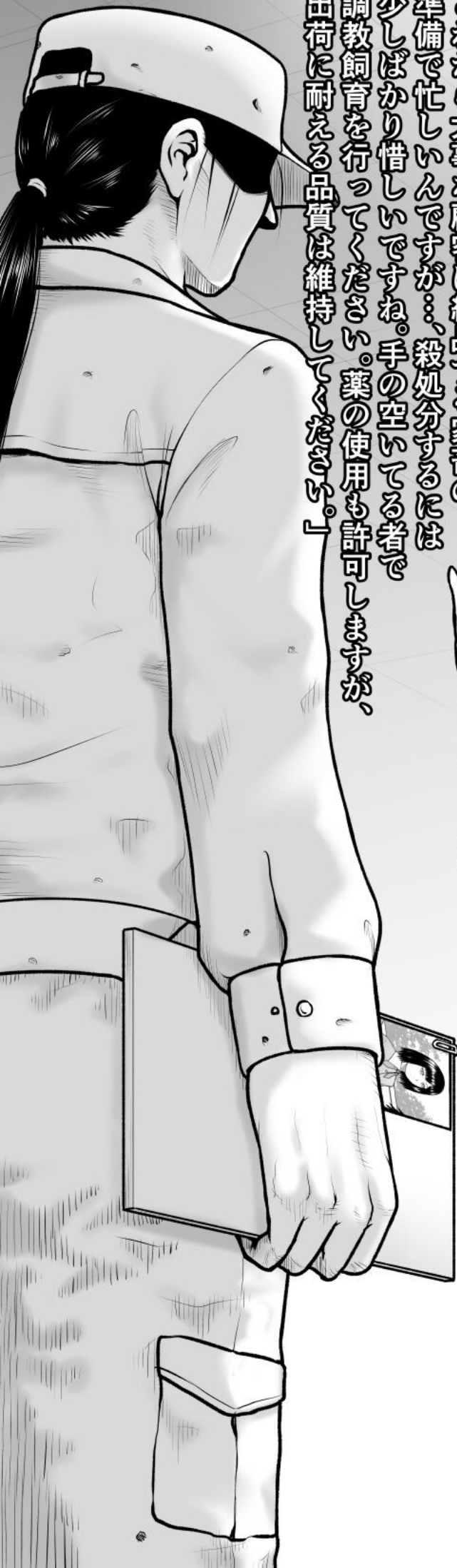
「まだですか…、困りますね。これから大事な顧客に納品する家畜の準備で忙しいんですけど…、殺処分するには少しばかり惜しいですね。手の空いてる者で調教飼育を行ってください。薬の使用も許可しますが、出荷に耐える品質は維持してください。」



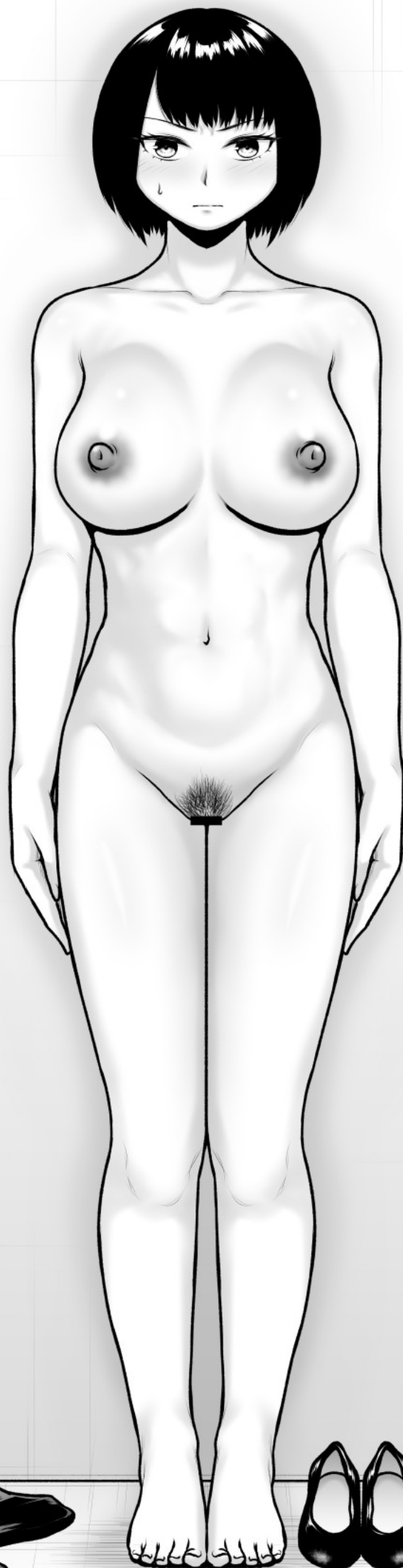
男の言動の意味を完全には理解できなかったが自分がただで済まないのを美冬は覚悟していた。「…現役の警官を何人も始末したら面倒なことになるんじゃない？」
僅かながらの抵抗で美冬は男を軽く挑発した。

それを聞いて男はこう答えた。

「心配には及びません。ようこそ『農場』へ…。」

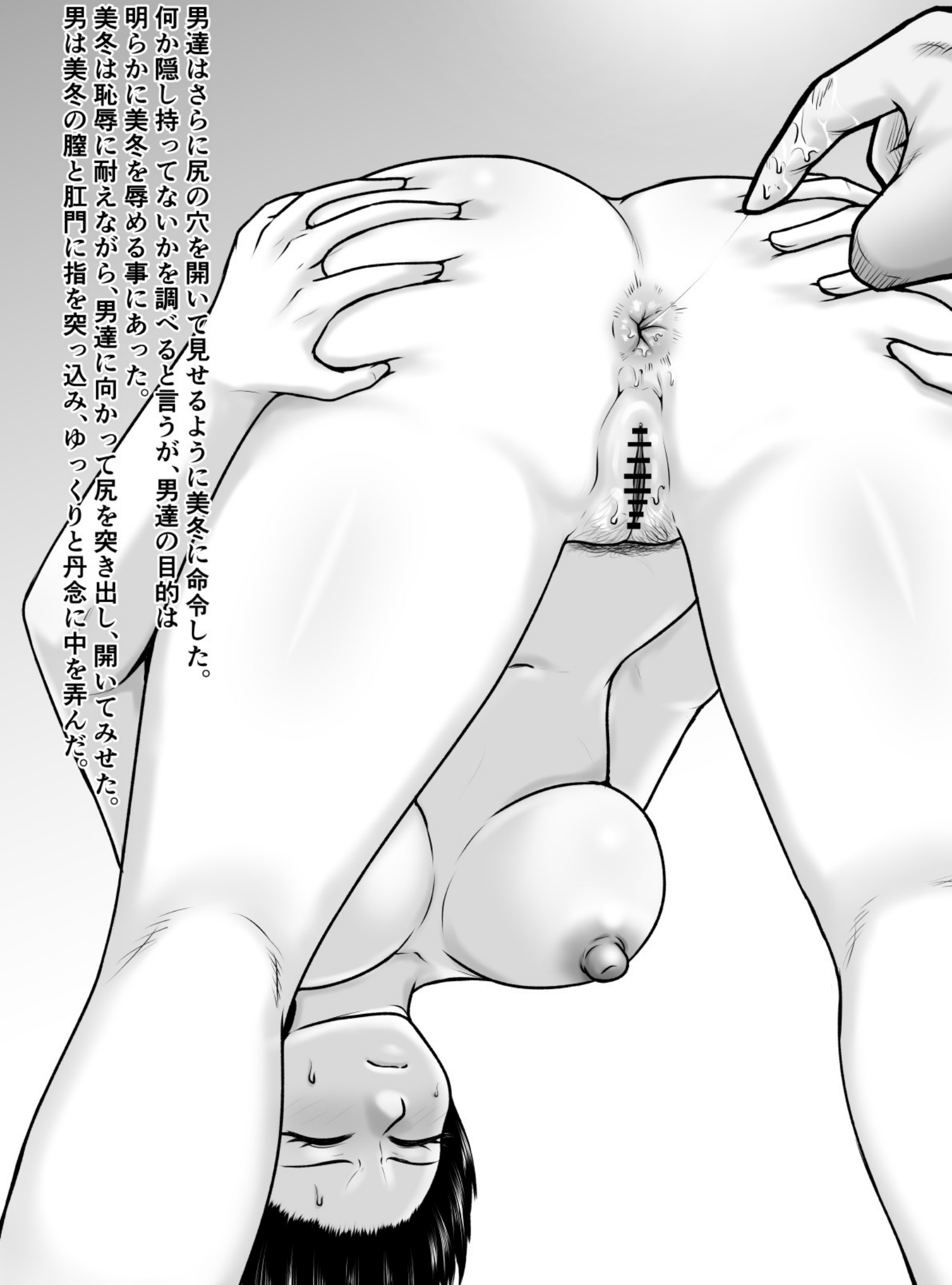


班長と呼ばれていた男と入れ替わるように部屋に大男が何人も入ってきた。男達はニヤつきながら、美冬に服を脱ぐように命令した。美冬は黙って命令に従った。男達は美冬が服を脱ぐのを眺めながら、乳がデカいだの、色気のない下着だなどと言いたい放題にしていた。美冬が全裸になると男達は壁を背に直立で立つように指示を出す。当然、胸や性器を手で隠すことは許されない。



男達は全裸の美冬を様々な角度からカメラで撮影していく。美冬は羞恥に耐えながら、頭の中で何とか男達の隙を突いて脱出する方法はないかを必死に模索していた。

男達はさらに尻の穴を開いて見せるように美冬に命令した。
何か隠し持っていないかを調べると言うが、男達の目的は
明らかに美冬を辱める事にあった。
美冬は恥辱に耐えながら、男達に向かって尻を突き出し、開いてみせた。
男は美冬の膣と肛門に指を突っ込み、ゆっくりと丹念に中を弄んだ。





今度は足を広げ、自慰を見せると男達は美冬に命令する。躊躇する美冬に男は銃口を向け、同じ命令を繰り返した。耐え難い屈辱であっても恋人である美緒里を救出する為には何があっても美冬はここで殺される訳にはいかなかった。美冬は自らの乳房を掴み、性器に指を入れ、男達の命令を実行した。

男達の命令はさらに続く。
一人の男が服を脱いで男性器を指差し、口で奉仕しろと美冬に言った。
美冬は男性と性的な行為をした経験はなかったが、頭に銃口を
突き付けられ、迷ってる時間はなかった。

意を決し、美冬は生まれて初めて男性器を口に啜え込んだ。
口いっぱい広がる男性器の臭いと、舌に伝わる味に驚きつつ、
知識としてしか知らないフェラチオを再現しようとして、頭を前後に動かした。
男達は下手糞なフェラだ、噛んだら頭を撃ち抜くぞなどと罵倒と脅迫を繰り返す。
美冬は唾液や舌なども使い、必死に男性器をしゃぶり続けた。

じゅぽっ

じゅぽっ



男達は美冬を押し倒し、両手足を
押さえつけた。

禍々しく勃起した男性器が美冬の
秘部へ押し付けられる。

美冬は思わず、犯される恐怖に顔を
歪ませた。女性同士での性行為の

経験はあったが、性器への
挿入まで及んだ事はなかった。

そんな美冬の表情を見て、男達は
こいつ処女か？こんな体で

処女な訳ねえだろ。入れてみりゃ
分かんたる、早くやれなどと嘲る。

「あ……あ……あ……」

黒く熱を持った肉棒がゆっくりと体内に
入ってくる感覚は美冬にとって絶望そのものだった。

美冬の処女膜はあっけなく突き破られた。
男性器は深々と突き刺さり、美冬の体の
一番奥まで軽々と到達していた。

あがっ…

あ…

美冬は異物に体を貫かれる
初めて経験する苦痛に
呼吸すらままならなかった。
男達は美冬の性器から流れる血と
苦しむ様子を見て、嘲笑っている。
初めてなら、じつくり可愛がってやるか…と
男達の顔は悪意に満ち溢れていた。



男は苦しむ美冬の事などお構いなしに
激しく腰を動かし続ける。
少しずつ痛み慣れとくると同時に
美冬の心には激しい嫌悪感と怒りが
込み上げてきた。

ドキュン

ぽん

ドキュン

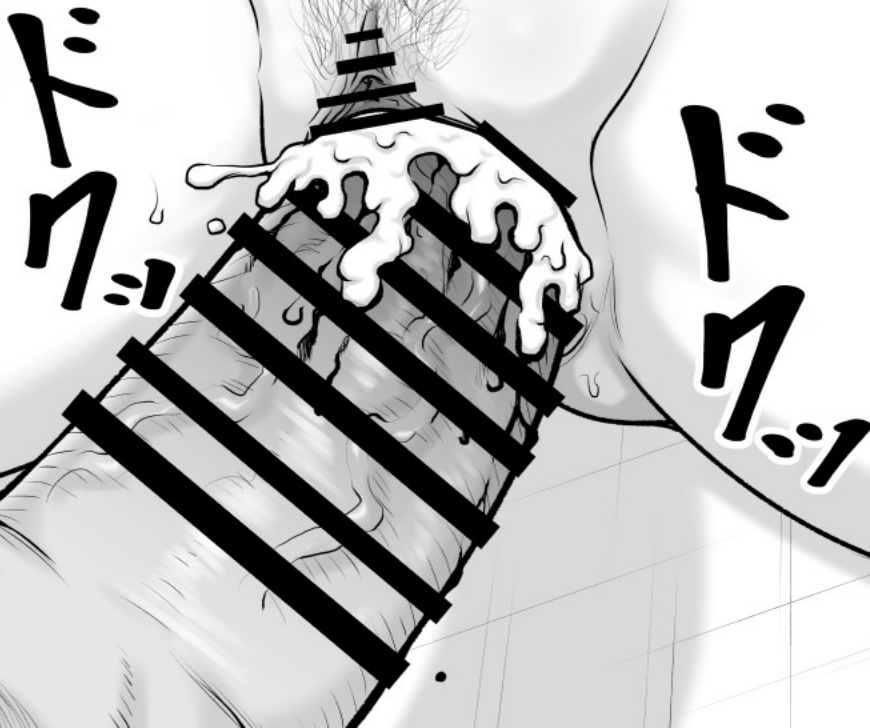
ぽん

「あつ……！がつ……！
やめつ……ろ！ぬ……抜けつ……！
こ……殺してや……る！
お前ら……全員……殺してつ……やる！」
警察官が殺すだつてよ、怖いねえなどと
周りの男達はおちゃらけている。
美冬を犯している男はそろそろ腔内に
出してやつから覚悟しろと言いつつ放った。
「な……腔内は……駄目つ！
いやっ……！抜いてつ！
やめてえええええええつ！！」



「あ……ああ……。
腔内なかに……出て……。」

美冬の体に突き刺さった
肉棒は脈打ちながら、熱い体液を
腔内なかに吐き出し続ける。
体が内側から穢されていく様な絶望感。
そんな絶望感の中でも美冬の心は
まだ完全には折れていなかった。
たとえ自分の身が穢されても愛する人を
救う為ならば、今は耐えるしかない……。
美冬はそう覚悟を決め、歯を食いしばった。



男達は代わる代わる
美冬を犯していった。
男達は射精するとすぐに入れ替わり、
美冬は一切休む間も与えられず
数時間に渡って、
犯され続けた。



「あ……がっ……、
うぶっ……おげえ……。」

美冬は自力で立てなくなるまで
徹底的に凌辱された。
胃や膣に限界以上に注がれた精液が
体の中から逆流し、溢れてくる。
男達は無様に倒れた美冬を
勝ち誇った顔で見下ろしている。

「……お……前ら……
……殺し……て……
やる……。」

美冬のせめてもの抵抗を聞いて
男達は一斉に笑い出す。
まだ負け惜しみを口にする元気が
残って嬉しげ。そろそろ『アレ』を
使うとするか。そう言っって男が
取り出したものを見て美冬は恐怖した。

「……それは……!?」

男の手には一本の注射器が握られていた。美冬はこの施設を突き止める過程でいくつもの違法薬物に関わる証拠を入手していた。

独自の調査で判明したのはこの施設で人身売買が行われている他に違法薬物が生産されている事、そしてここで生産されている違法薬物は出回っている既存の薬物よりも危険性が高い事だった。

「いや…あっ！
あ…ああああ…ああ…」

注射器から逃れようと必死に地べたを這う美冬の首筋に、無慈悲に針が刺し込まれた。



薬によって思考を奪われた美冬の体は本能のままに性交の快楽に身を委ねていた。回到に性器に肛門にとれだけ精液を注がれても、今の美冬は嫌悪感も怒りも感じない。

オッオッ

オッオッ

しかし男達は美冬の単調な反応に飽きてきたのか、一人がある提案をする。改良中の試作品を使ってみようか…。

ドッ
ドッ

ドッ
ドッ

ドッ
ドッ



「ひっぎゃあああああっ!?
んおっ!!おっ!!おっ!!おっ!!おっ!!」

男は先程の薬よりも強力である試作品を
性器に直接打ち込んだ。
激痛に朦朧としていた意識が引き戻され、
美冬は目を見開き絶叫する。
しかし、依然として薬によって
奪われた思考は戻らず、
何が起きているのかは
美冬自身、理解出来ずにいた…。

ビクッ

ビクッ



「あっ♡んあっ♡
んああああああっ!!
んおっおおおおっ!!」

試作品の強力な作用によって
美冬の脳内は快楽で満たされ、
体力的に限界を迎えているにも
関わらず、覚醒状態を維持させていたが…。



強力な薬物の連続投与、
そして長時間に渡る凌辱に
美冬の体は耐えきれず、
とうとう意識を失い
地面に倒れ込んだ。

男達は美冬の倒れた姿を
潰れた蛙のようだと笑いながら、
美冬の体を次々に踏み付けて
部屋を出て行く。

美冬一人が残された部屋に
扉を施錠する重々しい音が
響き渡った。



「ん…美緒里先輩…」
『美冬…』

『愛してるよ、美冬。』
「私も…」



美冬は夢を見ていた。
先輩であり、上司であり、恋人でもあった
村木美緒里と愛し合った日々の記憶…。

しかし、甘美な夢の中に留まっている事は許されず、
不快な音と違和感に美冬の意識は現実へと引き戻されていった…。

夢から目覚めた美冬に薬を使用した影響と思われる激しい頭痛や吐き気が襲ってくる。そんな最悪な状態でも美冬は視界を奪われ、拘束されている自分の状態をすぐに理解した。しかも、体には性感帯を刺激する器具が複数、固定されている。

どうにか逃れようとするが縄はキツく縛られており、椅子も地面に固定されていてびくともしない…。

さらに薬によるものなのか、美冬は自分の体が明らかに敏感になっていく事に気付いた。美冬は半日以上の間、この状態で放置され自分の意志に反して、幾度となく絶頂を繰り返した。



運動の時間だ、再び部屋に現れた男達はそう言っ
美冬の体に取り付けられた器具を外し、椅子から開放した。
しかし、依然として体の拘束は解かれず、視界も奪われたままだった。
男達は美冬の股ぐらに縄を通し、女性器に食い込むように縄を吊り上げた。
この状態で男達は美冬に歩くように命令した。

美冬は今は命令に
従うしかないと言
出したが、敏感にな
った体は縄の擦れに激しく
反応した。
一歩踏み出す毎に
声を抑えられない程
の刺激が全身に走
る…。
男達は美冬の体の
状態を理解している
様で、美冬は縄の上
を何十回も往復させ
られた。



そろそろ休憩させてやるよ、そう言っただけで男が美冬の目隠しを外す。ようやく休めると思った美冬だったが、期待は容易く裏切られる。美冬の目の前には三角木馬が用意されていた。「お：お願い：待って。今、こんなのに乗せられたら：。」美冬の懇願も虚しく、男達は美冬を木馬に乗せさらに逃れられない様に足を固定した。

「ひぎいっ!!あぎいいいいいいいっ!!」

木馬に食い込んだ性器から激しい痛みと刺激が同時に襲ってくる。

悶絶する美冬を尻目に男達は俺達も休憩するかと次々と部屋を出ていく。

「まっ：待って：!!お：降ろし：てっ：!!」

男達が戻ってくるまでの数時間、美冬は木馬の上で

絶え間ない痛みと刺激に必死に耐えるしかなかった。





男達が戻って来て、木馬を降ろされた頃には美冬は自力で立っている事さえ出来ない状態だった。しかし男達は容赦なく、美冬の乳房を縄で縛り上げてから性器と肛門に縄を結んだ鉄製のフックを深々と引っ掛け、それらを吊り上げる事で美冬に直立の姿勢を強制した。

ギッ
体を引き裂くような痛みにも美冬が絶叫していると男達は面白がって、乳房や肛門、性器、それぞれに繋がる縄を好き勝手、引っ張っては離すのを繰り返した。散々おもちゃの様に弄ばれ、激しい拷問の連続に美冬は精神は少しずつ限界へ近づいていた。

美冬は体力の限界で
倒れ込むと、肛門に何かが
挿入される感触に気付いた。

美冬が驚いて後ろを

振り向くと男の手には

巨大な浣腸器が握られていた。

「い…嫌っ！やめてっ！」

男は構わず、浣腸器の中の

液体を美冬の中に注いでいく。

これは昨日、お前が気持ち良くな

なってた薬だが、すぐに

意識が飛んじまうと

つまらねえから、浣腸液で

薄めといてやったと

男が得意げに言った。

「そ…、そんなのお尻に

入れられたら…あぐっ!!。」

浣腸器一本分の注入が終わわり、

男は浣腸器の補充の間、注入

した分が逆流しない様、美冬の

肛門に指を挿入し、蓋をする。

注入と補充を繰り返し、最終的に

5リットルもの液体が美冬の

肛門に注入された。



男達の中でも特に巨体の男が美冬の肛門を巨大な男根で塞ぐ。そのまま体を抱え上げられ無防備な状態の美冬の性器にもう一人の男が男根をねじ込んだ。

「うああああああっ!!
やめでえ! やべでえ!
もうやらああっ!!」

薬が混ぜられた浣腸液は美冬の体内へ急速に吸収され激しい腹痛と快楽が津波の様に次々に押し寄せる。
最早、美冬に強がる余裕など微塵も残っておらず、涙と鼻水とよだれで顔をぐちゃぐちゃにしながらか許しを懇願する。



当然、美冬の懇願は受け入れられない。男は妊婦の様に膨らんだ美冬の腹を弄びながら言った。良い顔じゃねえか、自分の彼女にもその面を拝ませてやれよ。
『ワン!』 「……え?」

それは人が犬の鳴き声を真似ているかの様な、明らかに人間の女性の声。美冬は恐る恐る声が出た方へ顔を向けた。

「……………み…美緒里…先輩？」

扉の前には班長と犬の様は首輪で繋がれた村木美緒里がいた。捜し続けた恋人との再会…だが村木美緒里は興奮した犬の如く、激しく呼吸しながら犬の鳴き真似を繰り返すだけ。

「彼女は明日、出荷予定でしてね。せめてもの情けで出荷の前に恋人と再会の時間を用意してあげようと考えた訳です。」

何故美緒里と自分の関係を男達が知っているのか、

美緒里の異常な状態、困惑で固まる美冬に構わず班長は言葉を続ける。



「警察の上層部には『農場』の顧客もいますし、ビジネスパートナーとしても良い関係を築いています。ですから『農場』に手を出そうとする者がいれば上層部は情報提供や協力を決して惜しみません。」

村木美緒里はそんな上層部に不審を抱き、あなたと同じ様に単独捜査を続けここに辿り着きました。自分の行動が全て監視されていた事に気が付かず…

それと彼女には存分に薬の改良に協力していた頂きました。より効率的な調教飼育が可能となり『農場』の生産性も向上する事でしょう。」

美冬は心の中で今まで自分を支えていた物が、音を立てて崩れ去るのを感じた…。

「さあ、大きく口を開けてお座りです。
あそこから大好きな薬が出てきますよ…。」

「ワンッ！ワンッ！」

班長の指示に従い、美緒里は美冬の
肛門の目前に待機し、男も美冬の肛門から
男根を引き抜こうと美冬の
体をゆっくりと持ち上げていく。

「いっ…いや！」

先輩！美緒里先輩！

私です！美冬です！

あっ…！駄目！抜かないで！

お願い！お願いだからっ！

駄目ええええええええ


ええええええええええっ！！



美冬の肛門から男根が
引き抜かれると同時に大量の
薬液が勢い良く吹き出した。
衝撃で無意識に放尿が始まる。
「あつ……。あああああつ
ああああああああつ!!」
全てを失った美冬の絶叫する姿を
班長は満足そうに眺めていた。



インシマママ




美緒里は美冬に一瞥もくれずに
興奮した獣の如く、自ら地面の薬液を舐めている。
「…美緒里先輩。」
変わり果てた恋人の姿は美冬の心を
失意の底に突き落とした…。

男は美冬の頭を地面にぶちまけられた
薬液に押し付け、一滴残らず舐めろと命令する。
美冬は黙って男の命令に従い、薬液を
舌ですくい上げていく…。
どれ程の屈辱や恥辱であっても美冬には
もう抗う意思は欠片も残されていなかった。

体に付着した薬液も全てだ、男達は二人に互いの体を隅々まで舐め合う様に命令する。美冬と美緒里は男達の目の前で全身に舌を這わせた。顔、首、胸、腕、腋、脚、肛門、性器…、美冬は美緒里の体を丹念に舐めていく。二人で愛し合った日々を記憶を美冬は思い出していた…。

男達に自分達の惨めな姿を晒しているにも関わらず、美冬は激しい快感が押し寄せてくるのを感じていた。例えそれが薬によるものだとしても、美冬にはもうどうでも良かった…。






最初に男性器を口に入れた時の激しい不快感、
精液の味や臭いへの嫌悪感も今は感じない。
むしろ膣への挿入を欲している自分がある。
身体の内側から無理やり自らのあり方を
捻じ曲げられていく様な感覚。。。

恐らく美緒里も今の自分と同じ様な
過程を辿ったのだらうと美冬は想像する。
しかし、行き着く果てが分かっていたても
美冬は全てを受け入れるしかなかった。

「はあ…はあ…美緒里先輩…！」
『へっへっへっへっ！えひひっ！』

男達に犯されながら
美冬と美緒里は舌を交わらせる。
しかし美緒里の目に美冬は
映っていない。

全てが手遅れで
何もかもが無駄だった。
だが、それでも美冬は
美緒里の名前を呼び続けた…。



男は美冬の髪を鷲掴みにして無理やり
体を起こすと首に薬を打ち込んだ。

美冬の視界には部屋の外へ引きずられていく美緒里が見えた。
薄れゆく意識の中、美冬は男に聞こえない様な微かな声で呟いた。
「愛してるよ…美緒里先輩…。」

助けられなかった。そして自分も助からない…。
しかし、どんなに堕ちて穢れても…この想いだけは変わらない。
そんな事を考えながら、美冬は眠る様にゆっくり目を閉じた…。

—某日、農場施設内 班長と運び屋の会話

「わふっ！わふっ！」

…こいつも、この前の
馬鹿な捜査官と同じ所に
納品すりゃあいいんだな？

ええ、お願いします。

そうそう、近々『農場』の規模を
拡大する計画でしてね。
その際はな…。

しかし…どこに運ばれて
行くのかも知らずに呑気なもんだ。

最上美冬捜査官、今後は
家畜として第二の人生を。
もしかすれば恋人との再会も
あり得るかもしれません…。

仕事が増えるって事だろ？
金さえ払って貰えりゃ文句はねえ。

話が早くて助かります。
今後ともよろしくお願いします。

「わふ！わふう！
んふ！んふ！」



■あとがき

サークル楽園屋の楽と申します。
この度はご購入頂き、誠にありがとうございます。

2-1 作目です。今作の本編は2022年1-1月から支援サイトに投稿した月1イラストシリーズをまとめたものになります。月1イラストシリーズとしては初のモノクロ作品で毎月数ページずつ投稿を行っていました。今作の制作中は作品とは関係ない事でのトラブルが色々あり、悩む場面や苦労も多かったですが、話の始まり方と終わり方は最初からある程度定まっていたので、どうにか無事に描き終える事が出来て良かったです。

絵に関しては、本編が1年間毎月描いた絵、描き下ろしが本編最終回から1年後に描いた絵になります。見返してみると劇的に画力を上げるのは難しい事だと実感しますが、少しずつでも画力を上げて、良い絵が描ける様に今後も取り組んでいきたいと思えます。

本編の内容に関しては、女性刑事で定番な感じの作品をコンセプトに考えていたので全体的にいつもよりソフトな展開で話を進めていきました。おまけの描き下ろしの方は本編では物足りなかった方向けに本編よりも過激な内容になっています。4ページの短い描き下ろしでしたが、漫画を描くのは随分久しぶりだったので少し不安もありました。実際に描き始めてみるとそんな不安もどこへやらで、最後まで落ち着いて作業が出来ました。なかなか難しいですが、またいつか漫画作品を描けたらいいなと思っています。

支援サイトの月1イラストシリーズは現在のふたなり作品がもうすぐ終わり、1-1月からはまた新しいシリーズが始まります。興味のある方は覗きにきていただけたら幸いです。

それでは機会があればまた別の作品で。ありがとうございました。

2023年10月10日 楽園屋 楽

Pixiv ID 41315964

FANBOX <https://rakuenya.fanbox.cc/>

X(Twitter) @rakuenya

※違法アップロードは犯罪です。10年以下の懲役もしくは1000万円以下の罰金またはその両方が科せられます。違法アップロードには発信者情報開示請求、損害賠償請求などの法的手段をとらせていただきます。

※2020年10月より改正著作権法が施行されました。

リーチサイトの運営、侵害コンテンツへのリンクの掲載も違法となります。

2021年1月より違法にアップロードされた著作物のダウンロードは刑事罰の対象となります。一定の要件の下で私的使用目的でも違法となります。

※本作は有償で提供している作品です。

注意事項！

・本作品はフィクションです。実在の人物、団体等とは一切関係ありません。

・18才未満の閲覧禁止

・無断転載・複製・複写・頒布・共有・改変・翻訳を禁じます。

・無断転載を行った場合、著作物使用料を請求致します。

・本書の内容には犯罪行為の描写がありますが、犯罪行為を推奨するものではなく、実際にこの様な行為を行った場合、法律により罰せられます。絶対に真似をしないでください。

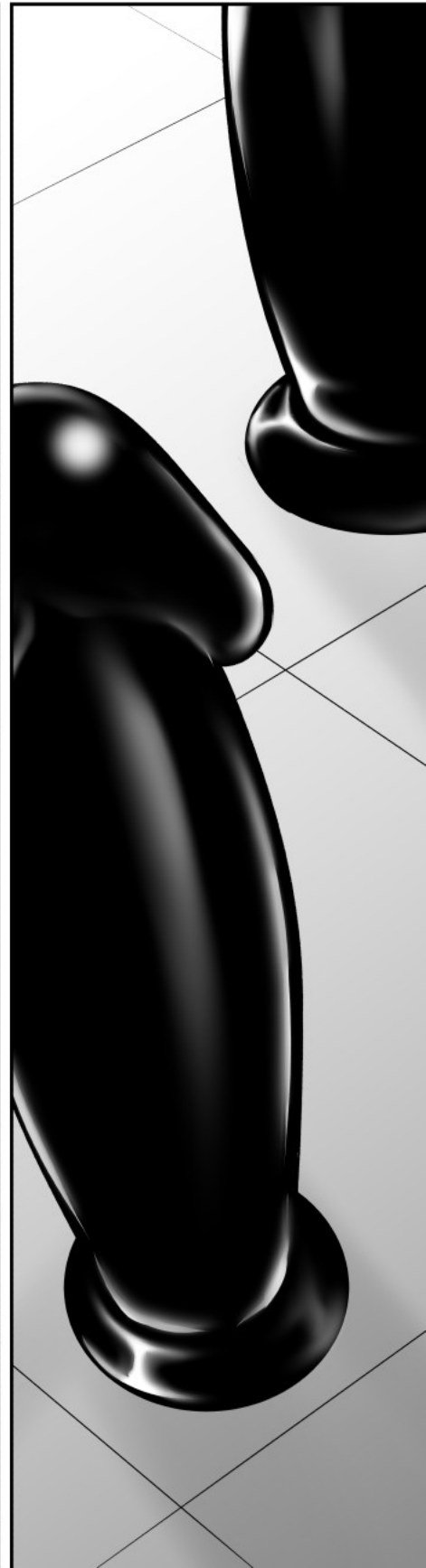
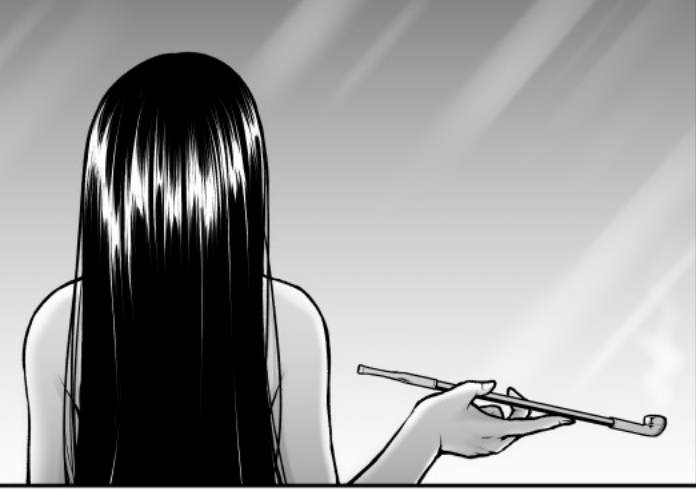
・違法アップロード等の著作権侵害行為を発見した場合、損害賠償請求、著作権侵害での警察への通報等の対応を取らせて頂く場合があります。

caution

Illegal upload, unauthorized reproduction, duplication, copying, distribution, sharing, modification, and translation are prohibited.

「農場」は美冬と美緒里を
犯罪組織が運営する娼館に
通称「刑場娼館」に
試供品として提供した





ステージ担当私だ
その豚共を下げて
川上母娘と交代させろ

だが…素材自体は悪くない
剥製師を呼んで処理しておけ
カタログに載せれば
すぐに買い手がつくだろう

ああ
ああ
そいつらは処分する

ここまで壊れていては
処刑する価値もない



DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止





